発達理論の学び舎

Back Number: Vol 160

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3181. 複数の奇妙な夢

3182. もう一つの夢

3183. ボストン旅行に向けて

3184. 複雑性科学の重要性の再認識

3185.【ボストン旅行記】夢の中の身体の重心

3186.【ボストン旅行記】安住の地に向けての想い

3187.【ボストン旅行記】内発的動機と内的時間

3188.【ボストン旅行記】ボストンに向かう機内での出会い

3189.【ボストン旅行記】五年振りのボストンの第一印象（第一身体感覚）

3190.【ボストン旅行記】チャールズ川を架ける橋の上で

3191.【ボストン旅行記】ボストン滞在の二日目の朝に

3192.【ボストン旅行記】懐かしのコンブチャ

3193.【ボストン旅行記】スティーブ・サイデル教授のクラスに参加して

3194.【ボストン旅行記】ハーバード大学教育大学院の芸術教育プログラムに所属する学生の声を聞いて

3195.【ボストン旅行記】自分に歩ける世界まで

3196.【ボストン旅行記】明日の計画と旅先での古書との出会い

3197.【ボストン旅行記】ボストン滞在三日目の夢

3198.【ボストン旅行記】教育界のノーベル賞「グローバル・ティーチャー賞」受賞者アンドリア・ザフィラコウ氏との出会い

3199.【ボストン旅行記】ハーバード大学教育大学院のプログラム説明会に参加して

3200.【ボストン旅行記】芸術教育を取り巻く社会的論説空間の変容に向けて

3181. 複数の奇妙な夢

今朝は六時前に起床し、六時を少し過ぎたあたりで一日の活動を開始した。今朝方見ていた夢について少しばかり思い出している。

夢の中で私は、砂浜にほど近い一軒の家の庭にいた。その庭と砂浜はつながっており、砂浜から庭までは傾斜になっていた。時刻は夕暮れ時から夜にかけての間であり、徐々に砂浜が闇に包まれているのがわかった。私はその庭で父と話をしていた。

父と私は庭の椅子に腰掛け、ゆっくりと話をしていた。時折景色を眺めては黙り、また少しばかり話をするということを繰り返していた。話の最中に私は三度ほど立ち上がり、手元にあったソフトテニスのボールを砂浜に向かって投げた。そのボールはどれも白色をしており、砂浜が完全に闇に包まれても、投げたボールが落ちた位置がおよそどこにあるのかがわかった。

三個目のボールを私が投げた時、「もったいなくないか？」と父が小さく呟き、確かに目的もなくボールを砂浜に投げていることに対して一瞬考えてみた。その時に私は、投げたボールを全て拾いに行こうかと思ったが、結局ボールを拾いに行くことをせず、父と共に部屋の中に入った。そこで夢の場面が変わった。

次の場面はとてもグロテスクな内容だった。今もまだ活躍しているある芸能人が整形手術に失敗するというものだ。

私は見覚えのない奇妙な家の中にいて、一人の精神科医と話をしていた。この精神科医は外見は外国人のようだが、生粋の日本人であった。精神科医と家の一室でとりとめもない話をしていると、一人の年配の男性がやってきた。見ると、今でも活躍している人気の芸人だった。どうやら彼はこの精神科医のクライアントらしい。その芸人が部屋に入ってきたところで、私は部屋を後にした。

部屋を後にしたはずだったが、私の意識はその場に残っており、それからそこで繰り広げられる一部始終を見届けることになった。まずクライアントであるその芸人は近況を精神科医に告げた。そこから精神療法的な会話が始まる。その会話の流れを私も追っていくと、途中で奇妙なことに気づい

た。どうやらこの精神科医は、その芸人の精神を巧妙に操作しようとしていることがわかった。会話の半ばを過ぎたあたりで、その芸人は突然頭と目の痛みを訴え始めた。

それを見た精神科医は不気味な笑みを見せ、手元にあった薬を容器に入った水に溶かし、それを芸人に飲むように勧めた。なんの疑いもなしにそれを飲んだ芸人は、一旦は状態が落ち着いたが、もうそこからは精神が錯乱しているようだった。

その状態を確認した精神科医は、次に奇妙な器具をいくつも揃え、それを使って芸人の顔を整形し始めた。実際にはそれは整形ではなく、目に棒のような器具を差し込み、脳のてっぺんに穴を開け、そこにも奇妙な棒を差し込んだ。その器具を目の中や脳内でこねくり回すと、その芸人の顔がどんどんと歪んでいき、最終的には元の顔がわからないくらいになってしまった。その一部始終を見届けた時、どうやらその精神科医はその芸人に対して恨みを晴らそうとして、そのような残虐な行為を行ったのだということが推察された。

そこでまた夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は高層ビルを改築したような病院の中にいた。その一階を歩いていると、英語を話す人たちの中に日本人の姿を少し確認した。彼らもみな、英語を話しているのだが、どことなく彼らが日本人であることがわかった。

私は「2A」という部屋を探していたのだが、なかなかそれが見つからず、近くにいた日本人に場所を教えてもらおうと思ったが、結局話しかけることをせず、自力でその場所を見つけることにした。

この建物の中央は吹き抜けになっており、各階が四方に設置されている巨大な階段で繋がっている。その階段を上っていると、小中高時代の友人が何人か上の階から降りてきていることに気づいた。

私は一つの隅の階段を上っており、四つの階段のうち、対角線上にある階段をその友人たちは降りてきていた。私はその場で彼らと鉢合わせになることを気まずく感じていたのか、彼らに話しかけることをせず、それでいて身を隠すこともなく、階段を上っていった。七階に到着した時、そこに「2A」の部屋があるとは思えなかったので、すぐさま階段を下り始めた。すると四階に到着した際に、急に体が重くなり、地面に倒れ込み、地面を這いつくばるようにして前に進もうとする自分がいた。数歩

© YOHEI KATO 2018

分地面を這いつくばると、一旦そこで止まり、一休みすることにした。そこでまた夢の場面が変わった。フローニンゲン：2018/9/26（水）06:52

3182. もう一つの夢

時刻は午前七時に近づきつつある。書斎の窓から空を眺めると、空が闇からダークブルーに変わりつつある。今日も夜が明け始め、一日がゆっくりと始まろうとしている。探究活動と創造活動に明け暮れていると、気がつけばボストン訪問が明日となった。

明日のフライトは午前11を少し過ぎた時間のものであるため、比較的ゆっくりしてから自宅を出発できると思っていたが、フローニンゲンからアムステルダムの空港までの移動時間などを考えると、結局ほとんどゆっくりすることはできないと思った。むしろ今日よりも早く起床し、六時を少し過ぎた頃には自宅を出発する必要があると思う。空港には早めに到着し、ラウンジでゆっくりとした方が賢明だろう判断し、明日は九時あたりに空港に到着するようにする。

明日は早いから、今日は夕食後に荷造りを済ませ、夜の九時半あたりには就寝したい。いよいよ五年振りのボストン訪問が近づいている。

起床直後に今朝方の夢について書き留めていたように思う。改めて夢について思い出していると、もう一つ別の夢を見ていたことを思い出した。

夢の中で私は、ある建物の一室にいた。そこにはもう三人ほど同年代であろうと思われる男性がいた。私は確かにその部屋にいたのだが、それは肉体的にそこにいたわけではなく、意識だけがそこにあるような形であった。つまり、私は彼らのことが見えるのだが、彼らは私の存在に気づいていないようだった。

彼らに近寄ってみると、何やらクイズの問題を解いているようだ。その問題を眺めると、数学の問題であった。それに気づいた時、時間が少しばかり巻き戻された。一人の男性が数学の問題を読み上げ、残りの二人は問題文を聞きながら問題を解くことを要求されていた。二人とも日本の中高一貫の名門校に通っていたらしく、実際に頭脳明晰であった。どちらの男性も独特なメモの取り方をしており、問題文が読み上げられるごとに素早くメモを取っていた。結果としては、二人ともその問題

に正解していたのだが、メモの中身と解法プロセスが随分と異なっていた。一人の男性は、メモを聞き、そのキーワードをメモしながら問題を解いていっているようであった。

もう一方の男性は、言葉を一切介することなく、問題文が読み上げられるのに合わせて簡単な数式を書いていた。解法のプロセスに関しても、前者はいくつかの数値を数式に当てはめながら強引に正解を導き出していたのに対して、後者はとても綺麗な数式だけがそこにあり、簡潔に正解が導き出されていた。

その問題には絶対値の記号が含まれており、正解は「-3」だということを覚えている。二人のメモの中身と解法プロセスの差を見て、夢の中の私はとても興味深く思っていた。一つ前の夢に加えて、そのような夢も今朝方に見ていた。夢の中に現れるシンボルや数字に関しても、何かしらの意味がそこに含まれているのだろう。絶対値を示す記号と「-3」という数値は一体何を示しているのだろうか。
フローニンゲン：2018/9/26（水）07:17

3183. ボストン旅行に向けて

今日も気がつかない間に午後の四時半を迎えた。午前中に協働プロジェクトに関するオンラインミーティングが二時間ほどあり、それ以外の時間は読書と作曲実践をしていた。その他には、明日から始まるボストン旅行に向けて諸々の最終確認をしていた。フライトのチェックインをウェブ上で行い、すでにボーディングパスを得た。

ストックホルムの空港で犯したフライトを乗り逃すという失態をしないように、今回は気をつけようと思う。明日からのボストン旅行に向けた荷造りは、夕食後から行う予定であるが、今回の旅も荷物は最小限にしようと思う。

ボストン市内の古書店をいくつか巡る計画を立てているため、そこで何冊か書籍を購入するかもしれないことを考え、行きに関しては書籍を持っていくのではなく、印刷した論文を数本ほど持っていくことに留めようと思う。論文であれば随分と軽いであろう。それらの論文はどれも、今回ハーバード大学教育大学院（HGSE）で聴講することになったクラスに関するものにする。一つは、芸術教育プログラムのディレクターを務めるスティーブ・サイデル教授のクラスであり、もう一つは、教育哲学者のキャサリン・エルギン教授のクラスである。

参加する二つのクラスで課題となっている論文についてはすでに一読を済ませたが、クラスに参加する前日にもう一度読み返したいと思う。また、エルギン教授のクラスに関しては明確な事前課題があり、その課題をもとに当日のディスカッションが進んでいくようであるからそれに向けた準備も行いたい。この準備に関しては、明日のフライト時間は七時間ほどあるため、機内の中で課題に取り組もうと思う。

今回はHGSEの訪問の他にも、ボストン美術館、イザベラ・ガードナー美術館、ヘンリー・デイヴィッド・ソローが生活をしていたコンコードの森に訪れようと思っている。ソローが実際に生活をしていた家、そして墓を訪れる際に、エマーソン博物館にも足を運ぼうと思っていたのだが、ちょうど私が訪問する日には博物館は閉まっているらしく、今回は中に入ることを諦め、エマーソンの家の外観を眺め、どのような場所でエマーソンが生活を営んでいたのかを肌感覚で掴むことに留めようと思う。

今回はボストンに七日ほど滞在する。滞在期間中にぜひとも、進学先候補の大学院に提出する志望動機書のドラフトを書き上げたいと思う。現在、芸術教育に関する哲学的・実践的な内容を学べるプログラムがいくつか存在することを知り、HGSEを含め、何校かに応募する予定でいる。

志望動機書に関して一番多く分量を要求するHGSEの志望動機書のドラフトをまずは作成したい。これはぜひ、HGSEの近くに滞在している今回の旅行中に書き上げたいと思う。ホテルの近くのカフェや、せっかくなのでHGSEのカフェに立ち寄り、そこでドラフトを書いていくのが良いかもしれない。四年前に米国を離れて以降、それから一度も米国には足を踏み入れていないので、今回の旅行がとても楽しみだ。フローニンゲン：2018/9/26（水）16:43

3184. 複雑性科学の重要性の再認識

遠くの空に浮かぶ雲が西日によって光り輝き、その雲の近くには飛行機雲が見える。また、空を優雅に舞う鳥たちの姿も目に入り、顕現世界の多様性に改めて驚かされる。そのようなことを思っていたのが昨日の夕方だ。今日も夕方の時間を迎え、辺りは穏やかな雰囲気に包まれている。

幸いにも、明日からのボストン旅行に関しては滞在期間中ずっと天気が良いようだ。もちろん、天気は予測の難しいダイナミックシステムであるから、折り畳み傘を忘れずに持参したい。

今日も一日中書斎の中で過ごしていたが、秋のそよ風の動きを窓から眺めることを随分と楽しんでいた。私たちの人生が多様な形で進んでいくのと同じように、そよ風の動きも実に多様である。

この世界は本当に多様性で満ち溢れている。それは言い換えれば、この世界には、置き換えることが不可能な固有の存在で溢れているということだ。

今日の午前中に行われた協働プロジェクトに関するミーティングの中でも、一人一人の人間の発達や学習の固有性に関するテーマが少しばかり取り上げられた。

私たちの発達や学習は固有であるのと同時に、普遍的な特性を持つことも確かだ。まさに発達心理学の貢献の一つは、発達や学習のプロセスの多様性を尊重しながらも、そこに見られる普遍的なプロセスを見出したことにあると言えるだろう。私たちの発達や学習は、固有性を持つのと同時に、普遍性も兼ね備えているということを忘れてはならない。

今日は旅行に向けた準備もあったため、読書に関しては今のところ、“Rethinking the Education Mess: A Systems Approach to Education Reform (2013)”を読んだことに留まる。ハワード・ガードナー教授が執筆した“The Disciplined Mind: Beyond Facts and Standardized Tests, the K-12 Education That Every Child Deserves (1999)”については、ボストン旅行から戻ってきてから読むことにする。本日読んだ書籍は今回が二読目であるが、いろいろと考えさせられることがあった。最たるものとしては、人や組織は非常に複雑なシステムであり、人や組織の発達を支援していくことの困難性である。

そもそも私たちは、事物の「ありのままの姿(as they are)」を見ているのではなく、その代わりに、私たちは事物を「私たちとして(as we are)」見ている。すなわち、私たちは事物の複雑性をそのまま認識することはできず、私たちの認識の成熟度に合わせる形でそれを捉えていくことしかできない、ということである。

現在、教育哲学の探究に並行して、フローニンゲン大学で探究を続けていた複雑性科学に関する探究を改めて行う必要性を感じている。人や組織の発達に関わる機会が増えれば増えるほど、それらの複雑性に私自身が常に驚かされてばかりであり、複雑性科学の知見は、複雑な現象の複雑性をないがしろにしない形でその現象に向き合っていく道を提供してくれる。

© YOHEI KATO 2018

確かに私は、もはや複雑性科学の分析ツールを使って研究することに情熱はほとんどないのだが、複雑性科学の発想の枠組みは人間や組織の発達現象を理解する際に極めて重要であり、おそらくこの知見がなければ、発達現象の説明はひどく限定的なものになってしまうと考えている。ボストン旅行から戻ってきたら、教育哲学及び複雑性科学に関する書籍を再び旺盛に読み進めていこうと思う。フローニンゲン：2018/9/26（水）17:02

3185.【ボストン旅行記】夢の中の身体の重心

今日はいよいよボストンへ旅立つ日だ。今朝は五時に起床し、自宅を出発する前に少しばかり日記を書き留めておこうと思う。

六時を過ぎて少ししたら自宅を出発し、歩いてフローニンゲン中央駅まで向かう。ゆとりを持たせ、早めに駅に到着し、チケットを購入してから近くの売店でコーヒーでも購入したい。そこから二時間ほど電車に乗り、スキポール空港まで向かう。今回は午前中のフライトに乗ることもあり、早朝のこの時間帯に出発したとしても、空港に到着するのは早すぎるわけではない。

セキュリティーを抜け、空港のラウンジでくつろぐ時間は一時間半弱だろう。空港に向かうまでの列車の中、及びラウンジでは過去の日記を編集したり、過去に作った曲の編集を行おうと思う。機内では持参した論文と、ハーバード大学教育大学院で参加することになっているクラスの課題に取り組む。そのようなことをしていれば七時間のフライトはあっという間だろう。

ボストンに到着するのは時差の都合上、本日中の午後一時過ぎであり、当地についてからも活動する時間的余裕がある。ただし今日は、宿泊先ホテルの近場を散歩する程度に留めようと思う。

今朝方は不思議な夢を見た。いや正確には、夢の中で不思議な気づきを得た。

私は時々サッカーやバスケをしている夢を見ることがある。これまでは、夢の中での自分の身体が思うように動かずにもどかしい思いをすることがよくあった。おそらく自分の中で理想とするプレー、あるいは自分の身体が一番動けていた時のプレーのイメージがあり、それと夢の中の動きとのギャップに苦しむことが多々あった。しかし今朝方の夢の中では、「夢の中の自分の動きがイマイチなのは、重心が高いからである」という気づきを夢の中で得た。つまり、夢の中の自分が夢の中の自分を

見て、自らの身体の重心の位置が上がっていることを指摘していたのである。これはかなりまっとうな指摘であり、確かに夢の中の自分の身体は少しばかりふわふわと浮いているような感覚があった。言い換えると、地に足の着いていない感覚のままプレーをしているようなことが多々あったのである。その気づきを得たところで夢の中でのサッカーの試合は終わってしまったが、次回以降の夢の中で自分の身体の重心がどのように変化しているかは興味深い。夢の中の身体にも重心があり、それはもしかしたら現実世界の身体の重心とも関係し合っているかもしれない。

今日はこれからボストン旅行に出かけるが、自分の身体の重心は低く保ち、地に足の着いた形で旅を充実したものにしようと思う。これから最後の荷造りをして、もう少ししたら自宅を後にしようと思う。フローニンゲン:2018/9/27(木)05:58

A Drop on a Dark Night

It is approaching 9PM, and the outside world is thrown into darkness. It looks as if a drop came from a dark night. Groningen, 20:50, Wednesday, 10/17/2018

3186.【ボストン旅行記】安住の地に向けての想い

たった今、汽笛がなり、スキポール空港に向けた列車がフローニンゲン中央駅を出発した。今日のフローニンゲンはここ最近の冷え込みとは打って変わり、早朝でさえもそれほど寒さを感じなかった。起床してすぐに浴槽に浸かり、身体を温めたことも功を奏していたのかもしれないが、寒さを感じさせずに自宅から駅まで歩くことができた。むしろ途中からは汗ばむぐらいであり、ジャケットを脱いで早朝のフローニンゲンの町を歩いた。

時刻はまだ七時前であるから、今はまだ辺りが暗い。ここから薄暗い時間がやってきて、もう一時間すればすっかりと明るくなるだろう。

フローニンゲンの中央駅に到着した時刻は、早すぎず遅すぎずの時間であり、コーヒーを購入したらちょうど良い時間であった。今日はこれから過去の日記の編集をしたいと思う。先月の北欧旅行の最中に言及していた通り、旅の最中には過去の日記の編集がはかどる。旅をしながら今その瞬

間を十分に生き、同時に過去の自分が書いた文章から再び現在に向けて内省を行っていく。旅はそのようなことを可能にしてくれる貴重な機会である。

北欧旅行の際には、出発時にあまり日記を書くことができず、旅に向けた心身の準備が整っていない感覚があったことを思い出し、今朝は自宅を出発する前に日記を一つ書いた。今回のボストン旅行でも、旅の過程で考えたことや感じたことを日記に書き残しておきたい。おそらく私にできることはそれくらしかないだろう。逆に言えば、それを行うことが自分の大切な役割なのかもしれないと思う。

昨日もふと、確かに私は再び大学院に所属をし、自らの探究を深めていきたいと思っている。それは四つ目の修士号につながるかもしれず、その後に博士課程に行くかもしれない。しかし仮に博士課程に進学したとしても、その後にどこかの大学で教鞭をとっている自分やどこかの大学に所属しながら探究をしている自分の姿を想像することはできない。組織に所属できない自分がいることを十分に知っている。

自分の探究を真に深めていくためには、博士号を取得した後にはどこかの大学や組織に所属してはならないのだという思いが強くなる。そこから自分の居場所について考える。これは難しい問題だ。私はよく、自分がどこにいても何をしても、異邦人のような感覚がするのである。それは日本にいてもだ。むしろ日本で生活をしていた時の方が、今以上に自分が異邦人であることを意識していたように思う。これは自分の居場所を見つけるということや、自分の居場所を作るという単純な話ではないように思う。自分が真にくつろげる安住の地について思いを馳せる。

列車の窓から景色を眺めると、空に綺麗な満月が浮かんでいるのが見えた。フローニンゲン：2018/9/27（木）07:01

No.1326: A Breeze of Cherry Blossoms in Autumn

A peaceful atmosphere is omnipresent in Groningen today. Although it is already autumn, I can feel a breeze of cherry blossoms. Groningen, 10:15, Thursday, 10/18/2018

3187.【ボストン旅行記】内発的動機と内的時間

時刻は午前八時半に近づきつつあり、あと三十分ほどでスキポール空港に到着する。列車の窓の外にはのどかな風景が広がっている。

今日のオランダの天気は晴天であり、ほのかな朝日が地上に降り注いでいる。今日は木曜日であるが、いつもの通り、平日と休日の区別がもはや私にはない。

欧州での生活を始めてから今年で三年目を迎えるが、その間に私の時間感覚は随分と変容したように思う。平日と休日の境目がなくなっているというのは決して悪いことではなく、時間を区切ることなく、一つの全体としての時間を生きられるようになってきている証拠である。言い換えると、自分の人生を流れる固有の時間と真に一体になって生きられるようになっているということを意味する。こうした時間感覚が涵養された背景には様々なことが考えられるが、一つには日々絶えず、自分の内発的な動機に基づく活動だけに従事してきたことが大きいだろう。

外発的な動機に基づいて日々を生きることは、結果として外的な時間に沿って生きることを強制させられる。一方で、内発的な動機に基づいて日々を生きることは、絶えず自分の内側の固有な時間感覚に基づいて生きることを促す。これまでの欧州生活では、そうした日々を送ってきた。これからもそのように生き続けていくだろう。

自分の内発的な動機によってなされる活動はとてもシンプルなものだった。日記、作曲実践、そして読書。それら三つだけが残った。おそらく、今後の人生をこれら三つの活動を通じて生きていくことが、自分の人生を生きることなのだろう。もちろん、その他にも諸々の仕事に従事するだろうが、究極的な内発動機に基づいてなされる活動は上記の三つに絞られるように思う。

読みに読み、書きに書き、作りに作る生活。読むこと、書くこと、作ることに関しても究極的な目的が自己の内側に横たわっているように思うが、それを言葉にしてしまった途端に、それが外的な目的に姿を変えてしまうかもしれない。そうしたこともあり、今はあえてそれらを言葉にしない。言葉にならない感覚のまま、読みに読み、書きに書き、作りに作るという日々をこれからも送っていく。

© YOHEI KATO 2018

あと少しで空港に到着したら、速やかにセキュリティーを通過し、空港のラウンジでゆっくりとしたい。フライトを乗り逃さないように、搭乗便の英数字を確認し、搭乗が始まる少し前まではラウンジで過去の日記の編集を進めていきたいと思う。

明日と来週の月曜日にハーバード大学教育大学院のクラスに参加することに向けて、機内では、それらのクラスの課題に取り組む。フライトの時間が七時間ほどあるため、それらの課題以外には、デスクトップ上に保存していた諸々の論文を読み進めていきたい。特に、発達心理学に造詣の深い心理学者かつ経営学者であったエリオット・ジャックスの論文を読み進めていく。ボストン旅行の間にそれらの論文を読み、デスクトップを整理したいと思う。

朝日の輝きがより一層強さを増し、スキポール空港に到着するまであとわずかになったことを知る。フローニンゲン：2018/9/27（木）08:39

No.1327: Communication between Two Worlds

I went running today after a long time, which made me feel refreshed very much. I found the unity between mind and body. Groningen, 17:29, Thursday, 10/18/2018

3188.【ボストン旅行記】ボストンに向かう機内での出会い

今私は、ボストンに向けての機内の中にいる。飛行機に乗ってからもう数時間ほどが経つだろうか。おそらく、今はちょうど半分のところまで飛行機が進んでいるように思う。

スキポール空港に到着した時に、フライトが30分ほど遅れることがわかった。そこから直前になってさらに10分ほどフライトが遅れた。結局飛行機が飛び立ったのは、当初の予定よりも45分ほど遅かった。フライトの遅延があったが、それ以外は今のところ順調にきている。私の隣に座っている男性はとても気さくな方であり、これまで随分と話をした。機内で昼食を摂っている間中、ずっと話をしており、年齢は81歳とのことであるが、全くそのようには見えない。とても若々しく、とても知的な印象を絶えず私に与える。引退してすでに20年ほど経つとのことであり、引退前までは建築士として様々な建物の設計に従事していたそうである。引退後は、様々な国に旅行に出かけ、偶然にもフローニンゲンにオランダ人の知人がいるそうであり、そこに一週間ほど滞在していたそうだ。そのため、フロー

ニンゲンに関する話で少しばかり盛り上がり、フローニンゲンの後に訪れたオーストリアに関する話でも思わぬ共通点があることに気づいた。

今から数年前に私がオーストリアのザルツブルグに訪れた際に、ザルツブルグ近郊の小さな町オーベンドルフに立ち寄った時のことを随分前の日記で取り上げたように思う。なんと偶然にも、その方もフローニンゲンの後に、オーベンドルフの自然の中でしばらく時間を過ごしていたようだ。

こうした旅行話に花が咲くと、お互いについてより詳しく話すことになった。私はこれからボストンに行き、ハーバード大学教育大学院を訪れ、そこで何人かの教授と面会することについて話をした。また、来年には四つ目の修士号を取得しに米国に戻る予定であり、その後は博士課程に進学することを考えていると伝えた。

するとその方も自身のバックグラウンドについてより詳しく話をしてくださり、アイビーリーグの一つであるブラウン大学を卒業後は、名門校のイェール大学で建築の修士号を取得したとのことである。その後は建築士として引退するまでずっと働いていたようだ。幼少期はボーディングスクールに通っていたとのことであり、当時の時代において──おそらく今でもだろうが──、典型的な白人エリートである。そこから色々と興味深い話を聞かせてもらった。

イェール大学で在籍していた修士課程は、建築という特殊性からか、四年制のプログラムだったそうだ。私がハーバード大学に訪れるということを伝えると、両校のライバル関係について言及しないわけにはいかないというばかりにその話になった。

今この瞬間も、その方は私の横でタイム誌を読んでいる。時折、面白い記事があったら何かと私に話しかけてくる。先ほどは、ちょうど先日CNNのニュースで見ていたある議員のスキャンダルに関して詳しく背景情報を解説してくださり、トランプ政権に関するあれこれに関する話もしてくれた。80歳を過ぎたとは思えないほどにとても知的に活動的であり、大いに感銘を受ける。

ボストン到着までまだ時間があるため、この先もまたその方と色々と話をすることになるだろう。フライト中に退屈することはなさそうだ。ボストンに向かう機内の中：2018/9/27（木）09:49（ボストン時間）

3189.【ボストン旅行記】五年振りのボストンの第一印象（第一身体感覚）

ボストンに無事に到着し、今はホテルでくつろいでいる。アムステルダムからボストンに向かうフライトは予定よりも45分ほど遅れて出発をしたが、ボストンの空港に到着したのは予定よりも15分遅れ程度で済んだ。

ボストンの空港に到着し、空港の外に出てみると、今日のボストンはとても暖かいことに気づいた。来ていたジャケットを脱ぎ、上に羽織るものは何もなくても十分であった。その時の時刻は午後二時であったから、半袖で過ごしている人もいたぐらいである。今日のオランダも確かに気温は比較的暖かかったが、半袖で過ごせるような気温ではなかった。

ボストンの空港からはバスに乗り、サウスステーションまで行き、そこで電車に乗り換えた。五年振りにボストンの地に足を踏み入れた時、とても懐かしい感じがした。何よりアメリカに足を踏み入れること自体も四年振りであったから、本当に懐かしい思いが込み上げてきた。アメリカは自分にとって第二の故郷のような国であり、四年振りに故郷に帰ってきたという感慨深いものがあった。

一方で米国は英語を母国語としているから当たり前かもしれないが、空港内での入国審査の時からすでに、この国の文化が英語で張り詰めていることを察知する強い身体感覚があった。この感覚はバスに乗っている間にさらに高まり、バス停を降りてホテルまで少しばかり歩いている時により一層高まった。オランダに存在している言語空間とは違う密度がそこにあり、いかんせんアメリカを訪れたのは四年振りであったから、この言語密度の感覚を忘れていたようだった。

ホテルに到着し、荷物を降ろしてから私は散歩に出かけた。依然として、自分の身にまとわりつく身体感覚が消えず、それと向き合いながら散歩をしていた。

数ヶ月前にイギリスに訪れた時にも、英語が母国語である国の独特の言語空間から醸し出されるものを身体的に感じていたが、アメリカのそれとイギリスのそれは感覚的に随分と異なる。その違いについて言葉で説明するのは難しいが、身体を通じて得られる感覚が異なるとしか言いようがない。四年前の自分は、四年間もこのような国で生活をしていたのだと思うと、当時の自分に対して労いの気持ちが生まれた。果たして今の私は、この国の言語密度に耐えられるだろうか、と少しばかり怖くなった。

今のところ私は、来年は再びアメリカの大学院に進学しようと思っている。さらには博士課程もアメリカの大学院に進むことになるかもしれない。そうなると、これから六年や七年ほどアメリカで暮らすことになることを覚悟しておかなければならない。

ボストンは文化的にも素晴らしい町であることは確かだが、欧州の様々な町を訪れ、何よりもオランダという諸々の意味で過ごしやすい国で生活をしてきた私にとって、米国で生活をすることは実はそれほど魅力的ではない。米国にも素晴らしい町があることは確かだが、真に自分が安心して生活することのできる町があるかというと疑問に思い始めている。今日五年振りにボストンに来たばかりだが、滞在初日の印象はそのような内容であった。明日以降、この印象はどのように変わるのだろうか。それとも変わらないのだろうか。ボストン：2018/9/27（木）20:02

3190.【ボストン旅行記】チャールズ川を架ける橋の上で

時刻は午後の八時を迎えた。ボストンの現地時間の午後八時であるから、オランダではもう夜中の二時だ。

移動の疲れもあるだろうし、明日は早朝にスティーブ・サイデル教授のクラスに参加するので、今日は九時過ぎには就寝しようと思う。ボストンに向かう最中の機内の中で、私はボストンに吹く風について思いを馳せていた。なぜそのようなことをしていたのかわからないが、ボストンではどのような風が吹いているのかが気になっていた。ある町を吹き抜ける風の香りや質感にここ最近敏感になっているのかもしれない。それはなぜなら、風はその町に固有の感覚質を持つからである。そうしたことから、ボストンに吹く固有の風に想像を巡らせていたのだろう。

実際に今日ホテルに荷物を置いてから散歩している最中に、ボストンの風をたくさん浴びた。ちょうど今宿泊しているホテルは、チャールズ川が真ん前にあり、ホテルの自室からもそれを眺めることができる。

散歩の最中に、私はチャールズ川を架ける橋の上でしばらく佇んでいた。橋を駆け抜けていく風がとても気持ち良く、夕方のボストンの夕日も優しい温かさを持っていた。

橋の中腹で立ち止まり、チャールズ川を通り過ぎていく何艘ものボートを眺めていた。ハーバード大学のボート部の学生たちがボートを漕ぐ姿を私はしばらくぼんやりと眺めていた。

シングル、ペア、フォア、エイトのボートが次々にチャールズ川を通り過ぎていく様子をとても興味深く眺めていた。この優雅な川をボートで進んでいくのはさぞかし爽快だろうと思った。もし仮に私がシングルでボートを漕いでいれば、きっといろいろなことを考えながら川を進んでいくだろう。川を下ることも上ることも、人生の進行に喩えられるに違いない。

残念ながら今の自分はボートには縁がないが、まるで自分がボートを漕ぎながらチャールズ川を進んでいく姿を想像しながら、しばらくぼんやりと考え事をしていた。何か目的を持って考えることなしに、チャールズ川にきらめく夕日の反射を眺めながら、時折心に浮かぶ取り留めのないことをこれまたぼんやりと観察していた。

自分の考えを見るようでいて見ないような不思議な感覚があった。ある特定の思考がボートであり、思考を生み出す意識そのものがチャールズ川のように思えた。私はボートに囚われることもせず、チャールズ川にも囚われることもせず、その双方を同時に眺めているような感覚があった、つまり、思考と意識の双方をどこか天空から眺めるかのような、いや天空から眺めながらも同時にそれらと同一化しているかのような不思議な感覚があった。

「自分は確かにそれらを眺めているのだが、自分はそれらでもある」という感覚だったと言えば分かりやすいだろう。それを見ているのは私なのだが、見られているものも私であるという感覚。

あぁ、おそらくこれは見る者と見られる者との境界線が消失し、ある種の非二元の状態だったと言えるかもしれない。チャールズ川を架ける橋の上で、まさか非二元の意識状態に参入することになるとは思ってもみなかった。

今日チャールズ川をぼんやりと眺めていると、空のみならず、川にも何か自分を引きつけて止まないものがあることを再認識した。仮にボストンに住んでいれば、私はきっと毎日のようにチャールズ川沿いを散歩し、チャールズ川そのものと、そして川を進んでいくボートの姿を毎日眺めるだろう。
ボストン：2018/9/27（木）20:24

© YOHEI KATO 2018

3191.【ボストン旅行記】ボストン滞在の二日目の朝に

今朝は四時半を過ぎたあたりに起床した。実は時差ぼけの影響が思っていた以上に強く、昨夜は九時に就寝したのだが、そこからは一時間に一回ほど目覚めるような状態が続いており、結局四時半に体を起こすことにした。本当は六時に起床する予定だったのだが、四時半の段階ですでに目が完全に覚めているように思えたので、その時間から一日の活動を開始した。本日はボストン滞在の二日目であり、いよいよ本格的にボストン内で活動を行う。

今日は午前八時半から行われる、スティーブ・サイデル教授のクラスに参加することになっている。サイデル教授は、ハーバード大学教育大学院（HGSE）の芸術教育プログラムのディレクターを務めており、このコースは同プログラムに所属する全ての人が受講することになっている。

HGSEの芸術教育プログラムは、私が最も注目しているものの一つであり、どのような授業がそこでなされ、どのような学生が集っているのかを楽しみに今日の日を向けた。クラスの開始は八時半と少し早いのだが、何やら軽食が提供されるらしく、クラスの開始前に皆で軽食を食べながら雑談をし、その後にクラスが始まるらしい。そのため、今日は早めにHGSEに到着するようにホテルを出発したい。ホテルからHGSEまでは歩いて25分ほどであるため、七時半を目処にホテルを出発しようと思う。

昨日のボストンはとても暖かかったが、今日は少しばかり冷え込んでいる。最高気温は15度とのことであり、フローニンゲンとそれほど変わらないように思う。そのため今日はジャケットを羽織ってホテルを出発しようと思う。また今日は午前中から午後にかけて雨が降るようであるから、折り畳み傘を持っていくことを忘れないようにする。

今ホテルの自室の窓から外を眺めている。今回宿泊したホテルは、ハーバードビジネススクールに近く、チャールズ川沿いにある。こうした立地条件のためか、今回宿泊しているホテルはかなりの値段がしたが、それに見合うだけの環境を提供してくれている。ホテルの部屋はとても広く、一人で使うにはもったいないほどだ。旅行中は、ホテルの自室で日記を書いたり、作曲をしたりすることが多く、どのようなテーブルが備え付けられているのかは私にとって大切であり、今宿泊しているホテル

は窓際に大きめな丸テーブルと二つの椅子が置かれており、そのテーブルは諸々の作業をするのに最適である。

椅子に腰掛け、開放的な窓からチャールズ川を眺めながら日記の執筆や作曲をすることができる。フローニンゲンの自宅でも常に窓の外を見ながら仕事に取り組んでいるように、同じことが今回の宿泊先のホテルで行うことができて嬉しく思う。今日はこれから過去に作った曲を編集し、今日参加するクラスの課題論文をもう一度読んでおきたいと思う。ボストン：2018/9/28（金）05:39

3192.【ボストン旅行記】懐かしのコンブチャ

昨日は、四年振りに「コンブチャ（Kombucha）」を飲んだ。これは昆布茶ではなく、紅茶キノコと呼ばれる飲料であり、植物性の生きた微生物が詰まった発酵飲料だ。この飲料を初めて知ったのは、私がジョン・エフ・ケネディ大学に所属していた時であるから、今からもう六年ほど前のことになる。その時に、ホリスティック健康学科に所属している友人からこの飲料を教えてもらったことが最初の出会いである。

それ以降、西海岸で生活をしている時は時々この飲料を飲んでいた。ニューヨークで生活をしている時にはほとんど飲むことはなかったが、再び西海岸で生活を始めてからはこの飲料を時々飲んでいた。当時は、オーガニックな食材を豊富に揃えているホールフーズ・マーケットにしかコンブチャは置かれておらず、近所にあったトレーダー・ジョーズには置かれていなかった。しかし昨日、宿泊先のホテルの近くにあるトレーダー・ジョーズに足を運んでみたところ、コンブチャが置かれており、懐かしさもあって購入をした。様々な味付けがあるのだが、オリジナルな味付けのものを選び、ホテルの自室で早速飲んだ。とても懐かしい味であり、米国に住んでいた頃の記憶が自然と思い出された。

どうやらコンブチャは、数年前から日本でも入手可能になっているらしい。昨日飲んだコンブチャのボトルを見ると、数種類の植物性の菌がそれぞれ10億ほど飲料の中に存在しているらしい。それらを生きたまま体内に取り入れ、腸内環境を整えることができることがこの飲料の最大の売りである。昨日にボトルの八割ほど飲み、早朝に残りを飲んだ。

腸内環境に良いものを摂取したためか、時差ぼけの影響がありながらも早朝から調子が良い。今日もまたトレーダー・ジョーズに行き、夕食に合わせてコンブチャを購入したい。その際は、昨日と違う味を試してみるのもいいだろう。

時刻は午前六時を迎えつつある。今宿泊しているホテルの周りはチャールズ川を眺めることができ、眺めに関しては申し分ない。ただし、チャールズ川沿いの道が思っていた以上に交通量が多く、まだ太陽の日が昇らないこの時間帯にも多くの車が道を走っている。ホテルの防音対策がしっかりしてるとはいえ、完全に車の走る音を遮断できるわけではない。もちろんそれほどその音は気にならないのだが、自室からチャールズ川をゆっくり眺めたいと思っている私にとっては、ひっきりなしに通る車が少々気になる。

今日は午前中に激しい雨が降るようであり、雨が降る前にハーバード大学教育大学院（HGSE）に到着したいと思う。少し早めにHGSEに到着し、図書館のある建物のロビーでゆっくりするのが賢明かもしれない。

そのようなことを述べていると、ちょうど今雨がポツポツと降り始めた。もしホテルを出発する時間に雨が激しく降っているようであれば、今日は歩きではなく、バスを用いてHGSEに行くことにしたい。午前中に参加するクラスはちょうど昼までであり、まだ雨が降っている可能性が高いので、昼食はHGSEのカフェで摂り、夕方までカフェで日記の執筆を行ったり、大学院の出願に向けた志望動機書のドラフトを作成したいと思う。ボストン：2018/9/28（金）05:58

3193.【ボストン旅行記】スティーブ・サイデル教授のクラスに参加して

今この日記をハーバード大学教育大学院（HGSE）の図書館で書いている。つい先ほど、芸術教育プログラムのディレクターを務めるスティーブ・サイデル教授の授業が終わった。

和やかな雰囲気の中、午前八時半からクラスが始まり、正午にクラスが終わった。前半と後半ではクラスルームが変わり、前半は机と椅子を用いることをせず、教室内の広い空間の中で様々なアクティビティを行い、クラスの後半は、国連会議の場を想起させるような教室で授業が進められた。とても印象に残っているのは、前半のクラスの進め方が、ジョン・エフ・ケネディ（JFK）大学時代に経験し

ていたことと非常に似ていることであった。HGSEは、確かに研究大学院という側面よりも、教育に関するプロフェッショナルスクールという側面の方が強い。

しかし、ハーバード大学という印象から私は、クラスはより認知的な側面に焦点が当てられているのだろうと思っていた。だが蓋を開けてみると、私がJFK大学の時に慣れ親しんでいたようなインナーワークがクラス開始から二時間ほど続いたことには驚かされた。もちろん、教授によってティーチングスタイルは異なり、教える科目の内容からインナーワークが難しいものもあるだろうが、私はサイデル教授のクラスに大変好感を持った。

今日は時差ぼけのせいもあり、昼食後のこの時間帯は特に思考がうまく働かない。とりあえず、もう少し今日のクラスについて書き留めておく。

宿泊先のホテルを出発した際に、すでに雨が降り始めていたため、歩いてHGSEに行くことを諦め、バスを使うことにした。HGSEには過去に何度か足を運んだことがあり、バスが停車したハーバード駅からHGSEへの道のりはとても馴染みがあった。迷うことなくHGSEに到着した時には、時刻はまだクラス開始の45分前だった。早く到着したこともあり、クラスが行われる場所をまずは確認し、来週に参加する予定のキャサリン・エルギン教授のクラスの場所も確認した。それでもまだ時間があったため、HGSEの図書館に移動し、時間が来るまで今日のクラスの課題論文を読み進めていた。

クラスの時間が迫ってくると、図書館をあとにし、クラスが行われるキャンパスに移動した。クラスルームに到着すると、そこにはすでに何人かの生徒がいて、教室の真ん中にサイデル教授がいた。

私が部屋に入ってくると、サイデル教授もすぐに気づいてくださり、そこで挨拶と少しばかり雑談をした。先ほどサイデル教授のオフィスの場所を確認しようと思ったが、結局見つけられなかったことを伝えると、サイデル教授は窓の外を指さしながら、今いる建物とは道を隔てて反対側にある建物の三階にオフィスがあることを教えてくれた。日を改めてサイデル教授と面会をする予定になっており、その日にオフィスの場所を探すことになるとやっかいだと思っていたため、今日の段階でオフィスの場所を確認することができてよかったと思う。

サイデル教授との雑談をしばらくした後に、今日は私以外にも、クラスを聴講する者がもう二人ほどいることを知った。クラスの開始時間になると、机と椅子が脇に寄せられた広々とした教室内でその

場にいた30人ほどが大きな円になり、不思議な一体感の中でクラスが始まった。その感覚は、JFK大学で私がよく感じていたものと非常に似ており、当時を懐かしみながらも、もう一度深いインナーワークをする時期に自分の人生が差し掛かっているのかもしれないと思った。ボストン：2018/9/28（金）13:30

3194.【ボストン旅行記】ハーバード大学教育大学院の芸術教育プログラムに所属する学生の声を聞いて

ハーバード大学教育大学院（HGSE）のカフェテリアで先ほど昼食を摂り終えた。ちょうど今朝方の日記で言及していたコンブチャが、HGSEのカフェでも売られていることに思わず笑みが漏れた。五年前にHGSEに訪れた時にも、確かにヘルシーな食べ物がカフェテリアで食べられることに気づいていたが、その時はコンブチャは売られていなかったように思う。この五年間でHGSEの健康志向はさらに加速したようだ。

午前中に参加していたサイデル教授のクラスからは、その講義内容からも多くのことを学んだように思うが、それ以上に自分にとって有益だったのは、実際にこのプログラムに所属している生徒たちの生の声だった。

おそらくこのプログラムには30人ほどの生徒が所属しており、わずか三人だけが男性であり、残りは全て女性であった。教室に入り、実際にクラスが始まってみると、教室に充満する女性のエネルギーに対して圧倒されそうになったが、七年前にサンフランシスコでヨガのインストラクターの資格取得コースに在籍していた際も、私を除いてその他の人は全て女性だったため、その時の様子をふと思い出した。

まさかHGSEに来てそのような記憶を思い出すとは思っておらず、改めて自分は気付かぬ間にいろいろな経験を積んできたのだなと思った。今日私以外にクラスを聴講していたのは、ハーバード大学のあるケンブリッジエリアでウェルネス関係の二つのビジネスを行っているインド人の女性と、ニューヨークでアートセラピストの仕事に従事している中国人の女性だった。私以外の二人は米国で生活をして長いとのことであり、二人ともここでもう一度学び直しをしようという明確な意思を持っているようだった。私も彼女たちと同様に、もう一度抜本的な学び直しが必要だと感じている。

芸術教育プログラムに所属している学生たちは皆一様に親切であり、私と目が合うと、必ず何か話しかけてくれた。実際にこのプログラムに所属している学生からの声ほど貴重なものはなく、確かに学期が始まってまだ四週間しか経っていないが、このプログラムについて、そしてHGSEでの生活全般について色々なことを話してくれた。特に印象に残っているのは、このプログラムに在籍している者のうち、90%以上は何かしらの分野での芸術家であるか、芸術に関する仕事をしているとのことであった。音楽家、陶芸家、画家、ダンサーなど芸術領域は多岐にわたる。

芸術家や芸術関係の仕事をしていなければこのプログラムに入学できないというわけではないらしく、実際にプログラムに在籍する10%は芸術のバックグラウンドを持っていない人たちで占められているようだ。しかしそうした人たちであっても、芸術教育に関する関心と強い情熱を持っていることは共通点のようであった。

何人かの留学生がこのプログラムに在籍しており、特に彼女たちからは出願に関する話を色々と聞いた。やはりGREに苦戦したという話をシェアしてくれ、ただしGREはあくまでも出願項目の一要素でしかなく、その重要度もそれほど大きくないとのことであった。

実際にプログラムに在籍する生徒のみならず、テーィチングフェローを務めるとても気さくな女性と話をする機会もあり、数学的・統計的な研究をするためにHGSEに出願しない限り、GREの数学のセクションの点数はほとんど重要ではないとのことであった。

日本人の私にしてみれば、数学のセクションも重きを置いてもらえると有り難いが、その点については薄々気づいていたことであった。その代わりに、GREで比較的重要なのは読解のセクションとライティングのセクションとのことである。私はどちらのセクションも合格者のほぼ平均であり、読解セクションに関しては平均よりもやや下回るぐらいであったが、それであれば何も問題ないとのことであった。やはり何よりも重要なのは、1500字を上限とする志望動機書であるとその方が教えてくれた。

彼女は数年前にこのプログラムを卒業しており、今はサイデル教授のクラスのフェローを務めながらも、他の大学で英語を教えているとのことであった。その方からの助言としてとても参考になったのは、志望動機書には単に自分のこれまでの経歴や成し遂げたことを書くのではなく、どのような教授と共に学びたいのか、どのようなクラスをどのような目的で履修したいと思っているのかを含め、そ

のプログラムについて丹念に調べ、具体的にどのようなカリキュラムを自分でデザインしているのかを示していくことが重要とのことであった。

これはまさに私が志望動機書の中で明記しようと思っていたことであったため、自分の方針が間違っていないことを知ることができて有り難かった。仮にこのプログラムに進学することになれば、私はサイデル教授の二つのコースを履修し、教育哲学者かつ認識論者のキャサリン・エルギン教授の二つのコースを履修する。また、教育哲学をより深く探究していくために、批判理論の観点から教育について探究することを専門としているホウマン・ハロウニィ博士のコースを二つ履修しようと思っている。卒業要件の単位数を考えると、もう二つのコースを履修することが可能であり、一つには年明け早々に一週間ほど集中して行われる「芸術作品を見るとは何か？」に関する体験的かつ実践的なコースを履修したい。そしてもう一つは、教育倫理に関するコースを履修予定である。

八つのコースの内、一つのコースは極めて実践的な内容であり、残りの七つのコースは哲学的なものである。厳密には、五つの哲学的なコースと、サイデル教授の二つのコースはインナーワークの側面が多分にあるため、芸術教育に関する自分のあり方や思想を見つめ直す二つの自己内省的なコースを履修する予定であると言った方が正確だろう。

気づかない間に、随分と色々なことを書き留めていた。幸いにも雨が止んだようなので、これからハーバードスクウェアにあるいくつかの古書店に行き、そこで芸術教育や教育哲学に関する古書を探したいと思う。ボストン：2018/9/28（金）14:14

No.1328: A Dim Light On a Dark Night

I can see a dim light on a dark and meditative night. A sense of today's fulfillment passes a baton to that of tomorrow's fulfillment. Groningen, 20:34, Thursday, 10/18/2018

3195.【ボストン旅行記】自分に歩ける世界まで

時刻は午後の七時半を迎えた。この時間帯のボストンはもうすっかり暗闇に包まれている。

ホテルの自室から真っ暗な外の世界を眺めながら、通りの向こうにあるチャールズ川に思いを馳せる。先ほど、自分の人生がまたわからなくなっていた。

結局自分は毎日何をして、いったい自分はどこに向かっているのだろうか。そのような問いが脳裏を横切った。自分の中では自分が何をしていて、どこに向かおうとしているのかを分かっていながらも、自分があまりにもこの世界を知らず、そしてあまりにもこの世界に対して無力な存在であることを突如として突きつけられたような感覚があった。

なぜ今私はボストンにいて、欧州で生活をしているのか。なぜ今この瞬間の自分の人生が今ここにあるのか。

この世界に関与をしていくための何物も、今の自分にはないのだということを改めて知る。無知であり、無力である一人の存在がここに一人いる。

自分の学びを根本から変えていかなくてはならない。日々の生き方を根本から変えていかなければならない。さもなければ、一人の社会的な存在として、この世界と真に繋がりながら生きていくことなどできはしないだろう。明日から、今日からもう一度、自分の日々を、そして人生そのものを見直さなければならない。

ボストン滞在の二日目がゆっくりと終わりに差し掛かっている。振り返ってみると、今日という一日が存在していたことに驚く。

覚醒意識の中で、様々な事柄が映画のシーンのように流れ去っていった。一日が流れ去り、また別の一日がやってくる。

生きるということがどういうことなのか本当にわからなくなってくる。自分の内側には閉じられた一つの世界があるのと同時に、それは外側の世界に完全なまでに開かれている。究極的に閉じられていて、究極的に開かれている内側の世界のこの感覚に対して、今の私は少々戸惑っているのかもしれない。なぜ究極的に閉じているはずのものが、究極的に開くのだろうか。

究極的に閉じられていることに対して恐怖感を抱き、究極的なまでに開かれていることに対しても恐怖感を抱く。それはそれがなぜなのかわからないということに対する恐怖である。究極的に閉じていて、究極的に開かれているという矛盾するものを、一人の人間の内面世界以外に見つけることはできない。世界がますますわからないものに見えてくる。

© YOHEI KATO 2018

人間存在について学べば学ぶだけ、それがわからなくなってくる。もはや自分の存在も、自分の人生すらもがわからなくなってきている。いや、それは自分の存在だからこそ、自分の人生だからこそわからなくなってきているのかもしれない。

日本を離れて早いもので七年の月日が経った。結局この七年間の月日をかけてわかったことは、自分の存在も人生もわからないということかもしれない。

自分はまだ何もわかっておらず、これからも無知であることは変わらないだろう。おそらくここから新たな学びを始めていく必要がある。それはもはや学びという言葉では括れない類のものであるがゆえに、真の学びであると言えるだろう。ようやく、ようやく自分の学びが始まろうとしている。

今日この日から再び人生をやり直そうと思う。もう一度全てを一から学び直そうと思う。

無知で無力な私でも、きっとこの世界への関わり方があるはずだ。こんな自分でも一人の人間として生きることは可能なはずなのである。もうそれを極限まで信じるしか前へ進めなくなった。歩けるところまでいい。私はこれからの人生をかけて、自分に歩ける世界まで歩んでいこうと思う。ボストン：2018/9/28（金）19:59

No.1329: A Transition of Sunrise Glow

Colors of sunlight in the morning are changing moment by moment. Looking at the spectacle, I'm thinking about today's work. Groningen, 09:32, Friday, 10/19/2018

3196.【ボストン旅行記】明日の計画と旅先での古書との出会い

結局今日は一度も作曲実践をしなかった。アムステルダムからボストンにやってきた昨日も曲を作ることはできず、結局このまま丸二日曲を作らない日が続きそうである。

自分が行っている作曲は、音楽言語の形として外側に形になろうとするものに対して望む形を与えることであり、そうした衝動が内側に起こっていなければ、無理に曲を作る必要などない。とにかく自分の内側の要求事項に忠実となり、形になることを望む内的感覚が現れた時に、しかるべき形にすることだけを心がけていく。

今日も遅くとも九時半頃には就寝し、明日に備えたい。明日の朝、早起きをして一曲だけ曲を作ることができればと思う。今回のボストン旅行に持参した楽譜はモーツァルトのピアノ小作品が収められたものである。明日からは作曲を行うエネルギーが取り戻され、同時に創造を待つ内的感覚が姿を現し始めるだろう。

明日は土曜日だが、明日もまたハーバード大学教育大学院（HGSE）を訪れる。明日は午前九時から、HGSEの修士・博士プログラムに関する説明会が行われる。時間にして三時間ほどのイベントであり、軽食も支給されるとのことであるから、かなり力の入った説明会だと思う。今日HGSEを訪れて改めて実感したが、やはりHGSEを含めて、ハーバード大学の持つ諸々の力の大きさを実感した。

それらの力を個別具体的に取り上げる必要などほとんど無いであろうし、私もそうした力の存在は以前から頭では理解していたが、実際に当地に来て諸々の体験と観察をしてみると、ハーバード大学の持つ底力の大きさがわかってくる。

おそらく明日の説明会にも人的資源と金銭的資源を随分と費やしているのだろうと思う。正午に説明会を終えたら、その足で、ダウンタウンに出かけ、イザベラ・ガードナー美術館を訪れたい。これは先日、偶然にもボストン市内の美術館をあれこれ探している時に見つけたものである。所蔵作品の数によりけりだが、もしかしたら昼過ぎから閉館ギリギリまでそこにいるかもしれない。

美術館を訪れたあとに、一度宿泊先のホテルに帰り、一休みしてからボストンに在住の知人の方とディナーを共にする。これまでの旅において、旅先に知り合いがいるということは一度もなかったように思えるため、旅先で自分が誰かと一緒にご飯を食べているというのは少し不思議な感じがする。

ここから少しばかり過去の日記を編集して、今日も早めに就寝したい。今日はHGSEでクラスを聴講した後に、ケンブリッジ内の古書店に二店ほど足を運び、各店で三冊ほど良い古書と巡り会えた。

購入した書籍は、下記の六冊だ。

1. “Free the Children: Radical Reform and the Free School Movement (1972)”

2. “Standardized Minds: The High Price of America’s Testing Culture and What We Can Do to Change It (1999)”

3. “The Culture of Education (1996)”

4. “The Foucault Reader (1984)”

5. “Modes of Creativity: Philosophical Perspectives (2011)”

6. “Frames of Mind: The Theory of Multiple Intelligences (1983)”

ボストン滞在中は、これらの書籍に目を通す時間はあまりないかもしれない。もう二軒ほど気になる古書店を後日訪れ、購入した書籍はフローニンゲンに戻ってからゆっくりと読み進めていきたい。ボストン：2018/9/28（金）20:48

No.1330:Vibration of Autumn

It is evening now, and today is slowly approaching the end. I felt that autumn deepened very much. Groningen, 17:35, Friday, 10/19/2018

3197.【ボストン旅行記】ボストン滞在三日目の夢

今朝は五時半に起床し、すぐにシャワーを浴びて心身を目覚めさせた。昨日は午前中から昼にかけて雨が降っていたが、今日は一日中晴れのようだ。

時刻は午後六時半に近づいてきており、少しずつ日が昇り始めた。昨日、ハーバード大学教育大学院（HGSE）の芸術教育プログラムのあるクラスを聴講したことが刺激となったのか、今朝方は不思議な夢を見ていた。

最初の夢の場面で私は、三人の男に後をつけられていた。しつこく後をつけてくるものだから、途中で一度振り返り、ちょうど道の脇には小高い堤防があり、三人の男の眼の前で、私はバク転をして堤防の上に降り立った。その堤防は高さが10mほどあったため、普通の人間ではバク転をして堤防の上に足をつけることなど不可能なのだが、なぜだか私には特殊な身体能力があった。堤防の上から三人を見下ろすと、彼らは特に驚いた様子もなく、そのうちの一人が私と同じくバク転をして堤防の上に降り立った。そこで私はさらに、その堤防から空を飛んで彼らから逃げることにした。しかし、その堤防に降り立った男もまた空を飛ぶことができた。

それでは今度は、自分の姿を消し、透明人間になる技術を使えばもう大丈夫だろうと思って自分の姿を消してみたところ、なんとその男もまた透明人間になる技術を使った。ここまでくると、もう自力で逃げるしかないと思い、私は透明な姿のまま空を飛び、眼下に見下ろすことができた海の中へと姿を消そうとした。

透明人間の状態であるからもうその男は追ってこないだろうと思っていたのだが、その男は透明人間のまま私の後をつけてきた。その男は一言、「透明人間になっても追跡ができる。なぜなら人間の意識を消すことはできず、俺はお前の意識を追跡しさえすればいいからだ」と述べた。

その言葉を聞いた時、確かに身体はもはや目には見えなくても、自分の意識だけは存在し続けていることを改めて不思議に思った。だが、何としてでもその男の追跡から逃れたかったため、私は海の中を猛スピードで移動することをそこで止め、その男の意識そのものを消しにかかる行動に出た。その男に急接近したところで夢の場面が変わった。次の夢の場面では、私は教室の中にいた。

黒板の方に目をやると、クラス開始前に、小さな二人の男の子が黒板に宿題の解答を一生懸命に書いている。何の宿題かと思って彼らの板書を眺めていると、どうやら古文の現代語訳のようだ。

二人の男の子は、まだ小学校一年生ぐらいなのだが、字は非常に達筆であり、何よりも古文を読解できることを驚いた。二人は解答を板書することを済ませると、そこからは解答にまつわる絵を黒板に描き始めた。それらの絵も非常に創造性に溢れており、私はとても感銘を受けた。しばらくすると教師が教室に入ってきて、授業が始まった。

教師は静かに黒板の板書を眺め、その解答の出来を褒めていた。ただし、少しばかり不十分な訳の箇所があったようであり、そこを黄色のチョークで示しながら、より良い訳を書き込んでいった。教師は訳文にだけ意識が向かっているようであり、訳文の背景にある二人の絵には気づいていないようだった。気づいていたしても、それに触れることは一切なかった。

私はむしろ逆に、訳文などはどうでもよく、二人の男の子が描いた絵の方がより意味があると思っていた。そこでまた夢の場面が変わった。

チャールズ川沿いを走る女性の姿が見える。また、白いカモメが数羽ほど優雅に空を飛んでいる。

© YOHEI KATO 2018

今日は晴天に恵まれ、素晴らしい土曜日になるだろう。今日はこれから、HGSEのキャンパスに行き、修士・博士課程の説明会に参加する。その後、イザベラ・ガードナー美術館に足を運び、夜にはハーバード大学に在籍中の知人の方とディナーを共にする。今日もとても充実した一日になると確信している。ボストン：2018/9/29（土）06:46

3198.【ボストン旅行記】教育界のノーベル賞「グローバル・ティーチャー賞」受賞者アンドリア・ザフィラコウ氏との出会い

時刻は午前七時に近づきつつあり、辺りはもう随分と明るくなった。チャールズ川沿いにはランニングをする人、ウォーキングをする人の姿を随分と見かける。今日は雲一つない晴天であり、とても爽快な土曜日になるだろう。

昨日、ハーバード大学教育大学院（HGSE）の芸術教育プログラムのディレクターを務めるスティーブ・サイデル教授のクラスを聴講した時、私以外にも二人ほど聴講する者がいたことを昨日の日記の中で言及していたように思う。

実は昨日のクラスには、ゲストスピーカーとして、イギリスからアンドリア・ザフィラコウ（Andria Zafirakou）という方が招かれていた。最初私は、彼女も聴講者の一人だろうと思っていたのだが、サイデル教授がクラス開始前に、「アンドリアに今日のクラスの中で彼女の経験について話をしてもらう」ということを述べていたので、特別なゲストなのだということがわかった。

最初に、クラスに参加する全員で輪になり、グループ意識を養うようなアクティビティがなされた。その際に、ザフィラコウさんも含め、本日ゲストとして参加している四人の自己紹介を手短に行った。自己紹介が終わった後は、四人一組の対話の実践が行われることになっていた。その実践が始まる前に、ザフィラコウさんが私に声をかけてくださった。

確かに自己紹介の時間は短かったが、私が科学的な研究から芸術教育に関する哲学的・実践的な探究に道を変更しようと思っていることに対して、ザフィラコウさんがとても共感をしてくださったようだ。そこから彼女に対して質問をしていくと、彼女が「グローバル・ティーチャー賞」を2018年に受賞したことを話してくれた。その時に、私はその賞がどのようなものかを知らず、とりあえず祝福の言葉だけは忘れずに述べておいた。クラス前半のアクティビティが半分ほど終わったところで、教室の

真ん中に椅子を一つ置き、そこにザフィラコウさんが座る形で、彼女の経験に関する話となった。より厳密には、グローバル・ティーチャー賞受賞の背景にある彼女のストーリーがテーマだった。ザフィラコウさんの話と、サイデル教授からの問いかけなどによって、徐々に彼女が受賞した賞の凄さがわかってきた。

なにやら、世界中の3万人の応募者の中から今回この賞を受賞されたとのことであり、賞金は一億円ほどのようだ。彼女は、人種のるつぼと化しているロンドンのある地域で美術教師として働いており、子供たちが地域に溶け込みやすくなるような教育実践を行っているとのことであり、今回の受賞はその献身的な取り組みが評価されてのことだったようだ。

自己紹介の後にザフィラコウさんの方から私に歩み寄って話しかけてくれた時に、彼女の発するエネルギーの強さにはとても驚かされた。確かにこの次元のバイタリティーがあれば、グローバル・ティーチャー賞の受賞もあり得ると思わされた。自分の人生に与えられた役割に気づき、その役割を全うするために日々生きている人が放つ独特のオーラが彼女にはあった。彼女のオーラとエネルギーに触れながら、改めて自分がこの世界に果たしていく役割について考えていた。ボストン：2018/9/29（土）07:19

3199.【ボストン旅行記】ハーバード大学教育大学院のプログラム説明会に参加して

今日は土曜日であったが、午前中からハーバード大学教育大学院（HGSE）で行われたプログラム説明会に参加した。ホテルを早めに出発したはいいものの、乗るバスを間違えてしまい、途中でそれに気づき、随分と迂回しながらもなんとか定刻に開場に到着した。

説明会が行われた建物は、ちょうど私が出願を考えている芸術教育プログラムのディレクターを務めるスティーブ・サイデル教授のオフィスがある建物だった。その一階には大きなホールがあり、まずはそこで修士・博士課程に関する説明が行われた。質疑応答を含めて一時間弱の説明が終わると、今度はプログラムごとに現役の学生や卒業生を交えながらの説明会が二階で行われた。私はもちろん芸術教育プログラムの卒業生がいる部屋に入った。

部屋の前に長テーブルが置かれており、芸術教育プログラムに現在所属している学生を含め、その他には五つほどのプログラムの現役学生と卒業生がいた。その中に一人、昨年HGSEを卒業さ

れた日本人の方がおられ、この時間の説明会の後に個別にいろいろと話を伺った。その方は私よりも少し歳が上であり、とても丁寧に私の話を聞いてくださるのと同時に、実際にHGSEに通ったからこそわかる様々な事柄を教えてくださった。中でも、出願に関しての助言が非常に参考になり、今回のボストン滞在中に、出願に際して最も重要な志望動機書のドラフトを書こうと思っていたため、明日以降にドラフトを執筆する際にその方の助言を参考にしたいと思う。

振り返ってみれば、六年前と四年前に博士課程に出願したことは相当無茶なことだったのだと本日改めてわかった。HGSEの修士課程を卒業したとしても、博士課程に進学できる者はごくわずかであるということを今日改めて知り、当時の自分の出願は合格の見込みがほとんどない無茶なものだったのだと思う。また、六年前にせよ、四年前にせよ、当時は西海岸に住んでいたこともあり、実際にキャンパスに訪れることをせず、サンフランシスコ内で行われたプログラム説明会ぐらいにしか参加しておらず、教授に直接コンタクトを取るということもしていなかったように思う。

今回は、自分が本当に師事したいと思う教授が数名おり、そうした教授陣に連絡を差し上げることに一切の迷いはなく、可能であればボストンまで足を運び、直接面会をし、できればクラスを聴講させていただこうという強い思いを持っていた。

私はすでに欧米の大学院で修士号を三つ取得しており、四つ目の修士課程に進学することに関してはよく検討する必要があるという思いがあり、検討の一環として自分が師事したいと思う教授に直接会うことやクラスを聴講することは不可欠だと考えていた。また、そうした理屈を超えて、実際にHGSEに足を運び、その場所が本当に自分の探究活動をさらに前に推し進めていくためにふさわしい場所なのかを感じ取る必要があるという思いが、自分のアクションを生み出していた。

その場所に行き、その場所の空気を吸い、その場所の大地を踏みしめるという基本的なことが私には必要だった。八月末から九月にかけて北欧旅行に出かけたばかりであったが、私は迷うことなく今回ボストンにやってきた。今回のHGSE訪問は、自分のこれからの道を見極めていく上で本当に大切なことだったように思う。ボストン：2018/9/29（土）17:30

3200.【ボストン旅行記】芸術教育を取り巻く社会的論説空間の変容に向けて

今日はハーバード大学教育大学院（HGSE）での説明会を終えた後、その足でイザベラ・ガードナー美術館に立ち寄った。この美術館に関する話を聞いていた通り、美術館内の中庭がとても美しかった。だが残念ながら、所蔵されている絵画作品からは、何か強い印象や気づきを得られるものは一つもなかった。中庭の周りにある椅子に腰掛けて、中庭をぼんやりと眺めていた光景が一番印象に残っている。

先ほどの日記で書き留めていたように、ボストン滞在中にできれば今回の修士課程の出願に向けた志望動機書のドラフトを執筆したいと思う。HGSEが要求する志望動機書の字数は、他の大学院よりも多く、改めてこの機会にこれまでの自分の人生を振り返り、これからの展望に思いを巡らせることになるだろう。これは今の自分にとって必要なプロセスのように思われる。欧州での三年目の生活において、私は意図的に学術機関から距離を置くことにした。そこで自らの関心に赴くままに、誰からも制約されることなく、自分の探究を進めていこうと思い、そのような決断をした。これは結果的にはとても実りが多く、自分のこれからの探究活動の方向性を新たに見つめ直すことになった。

その延長線上に、今回の志望動機書の執筆があると位置付けている。今回志望動機書の中では、出願予定のプログラムの性質上、霊性教育について触れることはないだろうが、芸術教育になぜ自分が関心を持ったのか、そして芸術教育に自分がこれからどのように関わろうとしているのかをここで突き詰めて考える必要がある。

芸術教育の分野にこれからどのように自分が関わっていくかについては、この日記を通じて改めて書いていきたいと思うし、これまで断片的にそれについて言及していたように思う。ここ最近強く思う自分なりの関与は、「芸術教育を取り巻く社会的論説空間の変容」にあるのだと考えている。それは端的には、芸術教育を取り巻く人々の考え方の変容を目指すものであり、その実現に哲学的なアプローチと実践的なアプローチの双方を掲げている。中でも私は、哲学的なアプローチの方に強く重きを置いており、哲学的な方法をもってして芸術教育および芸術に関する人々の認識を変容させることに対して強く動機付けられている。

今の私が最も問題視しているのは、芸術の商品化および特権化であり、芸術教育の意義の消失の二つである。ここでは詳しく述べないが、私が問題意識を持っているのは、本来全ての人の人生の質を向上させ、自己の新たな側面に絶えず気づきを与えてくれる芸術というものが、いつの間にか万民のものではなくなり、一部の特権階級の人のものになりつつあり、同時に芸術があたかも単なる商品のように消費される対象となっている社会的風潮である。さらには、学校教育において芸術教育の存在感と意義は極めて希薄なものになっていることも問題視しており、それは子供たちの教育に関する問題だけではなく、成人の芸術教育というものの重要性がいかに社会に普及していないかという問題とも繋がってくる。

自分自身の経験上、実際に作曲をすることや日々絵を描く創造活動に従事することによって、人生の質が大きく変わったと実感している。芸術を商品として消費するのではなく、自らが創造活動に従事することによって、日々の生活の充実感と幸福感がこれほどまでに向上するのだと知ったことが、多くの人たちに創造活動に従事することの意義を伝えたいという自分の思いを生み出している。

その思いを伝えるためには、現代社会に蔓延する芸術および芸術教育を取り巻く論説空間を変容させていくことが不可欠だと考えるに行ったのである。言い換えれば、芸術を取り巻く人々の意識を強く縛る社会的な風潮を変えていくことなしには、人々が創造活動を通じて自らの人生の質を高めていくことには繋がらないだろうと考えたのである。この考えを実行に移すためには、教育哲学、とりわけ芸術教育を取り巻く哲学と、批判理論のような哲学的枠組みを習得する必要があると考えた。いやこれは考えたというよりも、切実な思いであった。

私はこれまで一度も哲学のトレーニングを学術機関で受けたことはない。そんなことは一切関係なく、ここから全く新しい分野に飛び込み、とにかく哲学的な修練を自らに課したいと思うに至った。芸術教育の意義を自分なりに深く考え、自分が見出した意義の一端が少しずつ社会に浸透してくれればという願いをもとに、これからの探究活動を進めていく。ボストン：2018/9/29（土）17:55